

本紙での「論壇時評」担当が終わった。当初は、年の予定が三年間の長きにわたっただけに、いま、肩の荷をおろしてほっとしているように見える。

従来と違って、国際社会と国内の諸事象との連関がますます高まり、ME（マイクロー）・エレクトロニクス（革命に象徴されるような社会的変化が激しい今日、いわゆる論壇の役割や機能も大きく変貌している。論壇誌といわれるものも、きわめて多様化している。論壇誌といわれるものも、きわめて多様化している。

「世界週報」、「エコノミスト」、「週刊ダイヤモンド」である。私は原則として、月単行本や新聞論調、ミニコミ誌では「中央公論」、「世界」、「文芸春秋」、「諸君」、「正論」、「Voice」、

「新潮45」、「プレジデン」の「現代の理論」、「経済往来」、「自由」、「現代の眼」（中途廃刊）の十一誌を基調とし、「現代」、「室石」、「歴史と人物」、「新潮45」、「プレジデン」

「ト」、「創」なども目を通した。

場合によっては「経済評論」、「新潮」などの専門誌や文芸誌、さらには「スターソマン」、「カレント」、「人」と日本、「コリア評論」などのミニ評論誌をも対象にした。週刊誌は「朝日ジャーナル」、「週刊東洋経済」、

「論壇時評」を終えて

中嶋 嶺雄



読したうえで、いよいよ執筆にかかるといふ苦行を続けたのだが、今日のような時代における時評子の役割の二つは、できるだけ多くの論点を読者に紹介することであると考えるたことであって、この三年間私がつりあげた論文点数は、およそ一〇〇編にものぼるのではなからうか。

それは二つには、それまでも、「論壇時評」の批判対象にもなってきた私が、攻守ところを変えて時評を担当するに当たっての心がまえでもあり、二つには、私自身の中国評論の仕事にちょうど一区切りついた時期だったため、いままら時評を担当してみてもよいという私的な心情に支えられていた。

大きな旋回期に

さて、毎月の時評からも明らかのように、この三年間は、わが国の言論界にとって大きな旋回期であった。従来保守・革新の対立という座標が政治の世界のみならず論壇においても通用しなくなったことはいままででもない。

わが国では戦後初期から六〇年代前半まで、一貫して「左翼的知性」が論壇をリードし、いわゆる理想主義の立場が圧倒的な優位を占めてきたのだが、いまやこれらの潮流は大きく凋落してしまっただ。ちょうど大学紛争一つのピークであった六〇年代後半以降は、いわゆる現実主義者の活躍が目立ち、七〇年代には明らかに論壇主流を形成したのである。しかし、八〇年代に入ると、憲法・防衛・戦後評価などの重要問題をめぐって現実主義者のあいだに亀裂が生じ、ハンス・J・モーゲンソウの言葉を借りれば「政治的現実主義の立場と軍事優先的現実主義の立場」とに別れてきたといえよう。前者は現状積極肯定の社会派、後者は愛国の精神派と色分けできるかもしれない。

お願いしますのポーズも、なにかリズムが合わない—東京・神楽坂で



なぜか横目が多すぎる

し。石川県小松空港に近い安宅の閑跡、あの有名な弁慶と九郎判官義経の像（ふしきに若き日の田中角栄氏によく似ている）も、被頭砕ける日本海をかんて見据えて、自信満々だった。判官殿を通してやるか通さないか、勧進帳の関守が君だなどと言つてもりはさらさらないが、心臓がずいりられない二つまだあった。帰った東京の街は、出る前よりさらに甲高い喧噪（けんそう）の街だった。シングルベルの商戦も、三文役者の揃い踏み選挙の方も。

「今回は多少減っても、どうせ次回でチャッだから……」と口宣言になった。そう言われてみれば、なるほど分かる。次回があるかどうかをくぐる心情は「来年もあるぞ」と思う年の暮れの庶民の心情とも似通いそうである。横目は、さすがと自虐に近しい。

二つした変化がいよいよ迎える。オーウェルの年一九八四年以降、どう進んでゆくのか。今日、論壇のもつ意味が思想や哲学の領域の問題としてますます薄れる一方、現実政治や政策とのかわりが大きくなってきているだけに、知識人の自立という問題と並んで、重要な注目点といわねばなるまい。

をかきめくり、つぎに見学させてもらったのだが、判官もさらに横目が似合う。あんなに保身系候補の応援者に訊

次回20日付に掲載。 (東大教授、国際関係論)

昇格され、越後三区は安泰な